

# 質問紙調査に見る教師の音楽指導観

## — 自由記述回答の計量テキスト分析を通して —

古山 典子<sup>(1)</sup>・瀧川 淳<sup>(2)</sup>

本稿は、2016年に実施した小学校、中学校、高校教師を対象とした質問紙調査の自由記述回答に計量テキスト分析を行い、教師の音楽指導観を明らかにしようとするものである。計量テキスト分析にはKH Coderを用い、自由記述回答での頻出語とその共起ネットワークを基に考察した。本稿でテキスト分析の対象としたのは、①学校教育における音楽科の必要性について、②小学校での音楽専科教師の必要性について、③大学で学ばせるべき知識や技術についての3項目である。分析の結果、音楽科の必要性はいずれの校種でも感性や心を育てるために語られているが、発達過程に即した理由も存在していた。また、小学校に音楽専科が必要な理由として、「技術」や「知識」を含めて高い専門性が必要であると考えられていることが示された。そして、教師が教員養成課程で学ばせてほしいと考えている内容には、校種によって差異があることが明らかになった。

キーワード：質問紙調査、音楽科、指導観、計量テキスト分析、テキストマイニング

### I 研究の目的

本稿では、学校教師の音楽指導観を明らかにすることを目的として、2016年に公立の小学校・中学校・高等学校で音楽を教えている教師を対象に実施した質問紙調査の自由記述回答に対して、計量テキスト分析を行った<sup>1)</sup>。

この質問紙調査の選択肢回答の分析については、「アンケート調査から見る音楽教師の音楽指導観」(古山/瀧川, 2017)にまとめている<sup>2)</sup>。そこで得られた結果を要約すると、以下の4点となる。

- ①「音楽科」は小・中・高のいずれの校種の教師も学校教育に必要だと考えているが、とくに初等教育において音楽科の必要性を感じている。
- ②いずれの校種の教師も、音楽科においては「音楽表現を楽しむこと」を重視しているが、学年段階が上がるに伴い、その割合は低くなっている。
- ③小学校教師が音楽指導において困難を感じているのは、「指導法」についてであった。

④「教材選択の仕方や指導内容」について指導上の困難さを感じているのは、経験の浅い教師が多い。

本稿は、主に選択肢回答の理由に関するテキストデータを計量的に分析し、教師の音楽指導観を明らかにすることを試みるものである。

なお、本稿で使用した計量テキスト分析ソフトウェアは、KH Coderである<sup>3)</sup>。テキストデータの内容分析は、量的分析と質的分析とを往還的に用いることによって、解釈を相互に補完しながら深めることができる点が特色といえる。KH Coderは、多変量解析を用い、分析者のもつ前提の影響を極力受けない形でデータを要約・提示すること、そしてコーディングルールの作成によって、「明示的に理論仮説の検証や問題意識の追究を行う」ことを目指して開発されたソフトウェアである<sup>4)</sup>。

### II 自由記述回答の分析方法

質問紙調査ではいくつかの設問について、選択肢を

(1)福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: n-koyama@fcu.ac.jp

(2)熊本大学教育学部音楽科

示して回答を求めた上で、その回答の理由を自由記述で尋ねた。

本稿で計量テキスト分析を試みたのは、主に以下の3点である。

- 1) 小学校・中学校・高校における音楽科の必要性について
- 2) 小学校での音楽専科教師の必要性について
- 3) 回答者自身が所属する校種において音楽指導を行うために、大学で学ばせるべき知識や技術について

ここでは、これら3点に対する自由記述回答のテキストデータについて、KH Coderを用いてまず単純集計を行い、Term Extractによって複合語を自動検出した。そして、検出された複合語を整理して再度単純集計を行い、頻出語の抽出と「共起ネットワーク」を作成し、それを踏まえて考察を行うこととした<sup>5</sup>。

なお、「共起ネットワーク」とは、出現パターンの類似した語のネットワークを図に表したものを指す<sup>6</sup>。線で結ばれているのは、強い共起関係を示している。また、共起関係が強いほど太い線で表され、円の大きさは語の出現数を反映したものとなっている。図中の色分けは媒介中心性により、色が濃いものほど中心性が高くなる。一方、配置された語の距離は、共起関係の強さとは無関係である。

また、ここでは自由記述の内容の解釈を極力教師の「生の声」に近づけることを意図して、テクニカルなコーディングルールは用いずに分析を行うこととした。

### III 分析結果

#### 1 小学校における音楽科の必要性

音楽科の必要性については、小・中・高の教師に各校種での必要性を尋ねていたことから、回答者の所属校種別に分析を行った。また、本稿では、義務教育である小・中における音楽科の必要性に焦点を当てて考察することとした。

##### 1-1 小学校教師による小学校音楽科の必要性に関する考え

選択肢回答では、いずれの校種の教師も「音楽科は必要」だと考えていたが、とくに「小学校に音楽科が必要」と考える教師の割合が高かった<sup>7</sup>。

そこで、小学校教師が「小学校に音楽科が必要」と考える理由のテキスト分析を行った。その結果、449

文、総抽出語数は2,042語で、出現回数が3回以上の語は74語存在した。この分析に当たって描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定した。

ここでのテキストデータの上位15位の頻出語と出現回数は表1の通りである。

表1 小学校教師が小学校に音楽科が必要だと考える理由の頻出語と出現回数（上位15位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
音楽	50	育む	11	経験	6
心	49	情操教育	11	高める	6
豊か	48	人生	9	児童	6
感性	35	表現力	9	触れる	6
育てる	28	育成	8	味わう	6
楽しい	18	生涯	8	役立つ	6
必要	16	生活	8	感じる	5
表現	14	身	7	喜び	5
養う	14	人	7	技能	5
楽しむ	12	歌う	6	合わせる	5
情操	12	教科	6	友達	5

また、出現語の共起ネットワークを図1に示す。

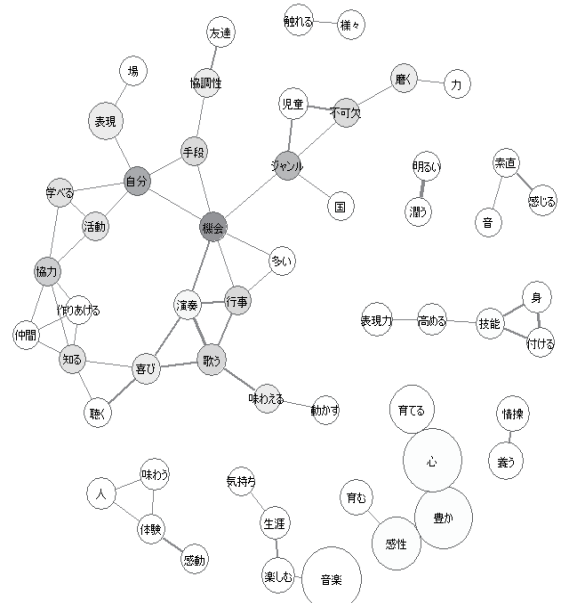


図1 小学校教師が考える小学校音楽科の必要性の共起ネットワーク

表1で示した自由記述における頻出語から、小学校教師が小学校に音楽科が必要だと語る際に、「心」、「豊か」、「感性」といった言葉を多く用いていたことがわかる。図1からも、音楽科が感性を育み、豊かな心を育てることを理由として、音楽科の必要性が語られていることは明らかである。



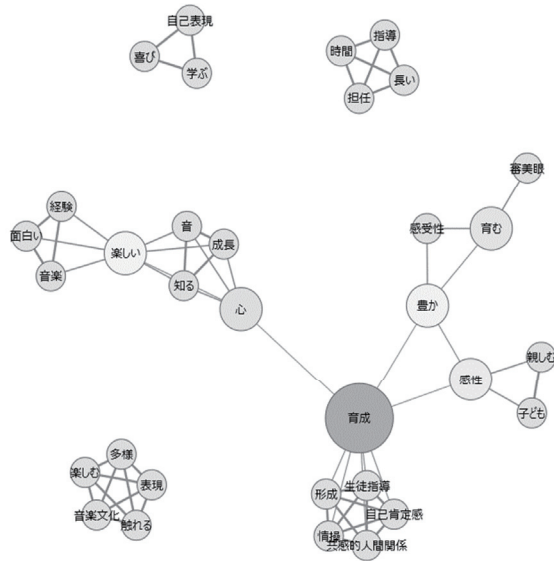


図3 高校教師が考える小学校音楽科の必要性の共起ネットワーク

## 2 中学校における音楽科の必要性

### 2-1 小学校教師による中学校音楽科の必要性に関する考え

では、中学校での音楽科の必要性について、小学校教師はどのように考えているのだろうか。

中学校音楽科の必要性に関する小学校教師の自由記述回答は、総抽出語数が1,095語、248文、3回以上出現する語は40語であった。また、ここでも、描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定している。

頻出語の上位10位までの語を表3に、共起ネットワークを図4に示す。

ここから、小学校教師は中学校音楽科に対して、より「高度な音楽」を扱い、「音楽を作り上げて」いくことをその必要性の理由として挙げていることがわかる。

また、「思春期」、「仲間」、「混声合唱」、「体験」といった語が表れていることから、学習者の発達段階を踏まえつつ、仲間とともに合唱を作り上げていく経験として、音楽科の必要性を捉えているといえるだろう。

そして音楽を作り上げることによって達成感や充実感を味わうとともに、協調性を高めるという点も理由としていることがわかる。これらは小学校の分析結果

表3 小学校教師が中学校に音楽科が必要だと考える理由の頻出語と出現回数（上位10位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
音楽	26	生活	4
小	23	専門	4
心	13	多感	4
育てる	10	体験	4
時期	8	味わう	4
豊か	8	養う	4
楽しい	7	感性	3
経験	7	技能	3
学ぶ	6	教科	3
小学校	6	混声合唱	3
表現	6	作りあげる	3
合唱	5	思春期	3
触れる	5	充実感	3
達成感	5	情操	3
必要	5	伸ばす	3
力	5	知識	3
クラス	4	仲間	3
協調性	4	有効	3
高める	4	理解	3
高度	4	良い	3

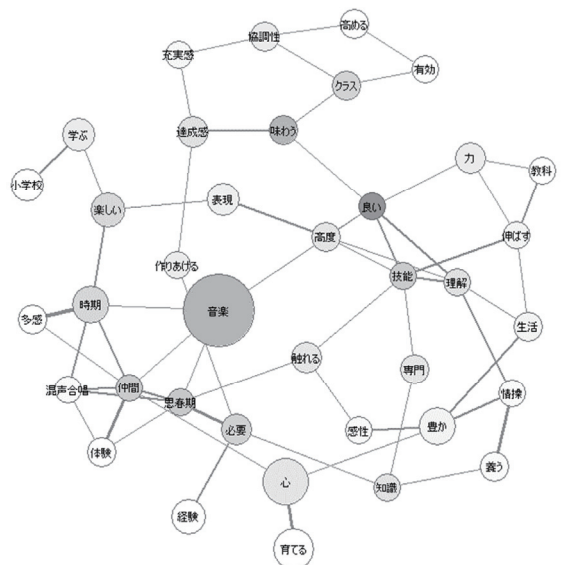


図4 小学校教師が考える中学校音楽科の必要性の共起ネットワーク

とも類似している。

一方、中学校での特徴としては、小学校では見られなかった「高度」、「表現」や「専門」、「技能」、「知識」といった語が現れており、それらに共起関係が見られたことが挙げられる。ここから、中学校ではより「専門的」で「高度な」音楽に取り組むために、また、表現の楽しさを認識したり、作り上げることによる達成感や充実感を味わわせたりするために音楽科が必要

だと考えられていることがうかがえる。つまり、「高度な」音楽に取り組むことによる成長を期待しているものと考えられる。

## 2-2 中学校教師の中学校音楽科の必要性についての考え

実際に中学校で教えている教師は、中学校での音楽科の必要性をどのように語っているのだろうか。

自由記述回答の総抽出語数は515語、116文あり、2回以上出現した語は41語であった。ここでも、分析に当たって描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定した。

自由記述での頻出語を表4に示す。

表4 中学校教師が中学校に音楽科が必要だと考える理由の頻出語と出現回数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
感性	13	達成	3
表現	12	磨く	3
豊か	10	協調	2
音楽	9	教科	2
情操	9	合わせる	2
教育	7	思春期	2
育む	5	時期	2
養う	5	手段	2
育てる	4	集団	2
育成	4	小学校	2
心	4	深める	2
人間	4	身	2
必要	4	成長	2
味わう	4	体験	2
学ぶ	3	大切	2
楽しむ	3	知る	2
喜び	3	仲間	2
高める	3	文化	2
自己	3	面	2
自分	3	理解	2
人生	3	(出現回数1回は省略)	

また、共起ネットワークは図5の通りである。

中学校教師も、小学校教師が小学校音楽科について「心を豊かにし、感性を育むために必要だ」と考えていたのと同様、「感性」を「育む」ことを必要性の理由として挙げている。また、「(他者と)合わせる」体験の大切さや、「思春期」、「心」、「成長」、「人間」といった語に共起関係が見られたことは、中学生という発達過程において音楽科が果たしている役割についての認識が表れているものと考えられる。一方、「自分」と「磨く」に強い共起関係があり、「自己」や「理解」、「思春期」とも繋がっていることは、小学校音楽科の必要性では見られなかった特徴であった。

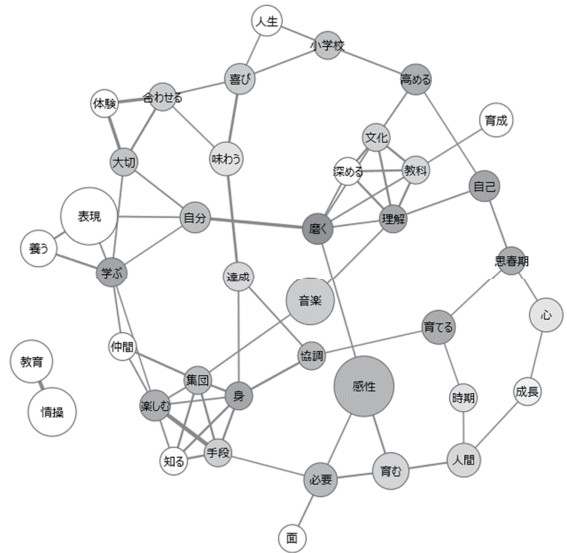


図5 中学校教師が考える中学校音楽科の必要性の共起ネットワーク

## 3 小学校での音楽専科教師の必要性

ここでは、小学校に「音楽専科」が必要な理由について、校種別の教師から得た自由記述を考察する。

### 3-1 小学校教師の考える「小学校に『音楽専科』が必要な理由」

これまでと同様の方法によって分析を行ったところ、文の集計数は599文、抽出語の総数は3,191語となった。そしてこの内、出現回数が5回以上の語は52語であった。頻出語の上位19位（出現回数：6回）を表5である。また、これらの頻出語に対して行った共起分析の結果を図6に示した。なお、分析に当たっては、最小出現数を5、描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定している。

ここから、小学校教師の考える「小学校に『音楽専科』が必要な理由」として、「音楽」、「指導」、「専門」、「知識」、「技術」といった語が頻出していることがわかる。これらの語の共起関係を見てみると、小学校でも音楽の専門性（技術や知識）をもった教師が教える必要性を感じていることがうかがえる。また、「担任」という言葉も頻出しているが、図6の共起ネットワークから、担任が教材研究や準備をするには負担がかかると考えていることがわかる。



これらから、中学校教師は「音楽」の「指導」において「技能」や「知識」を兼ね備えた「高い」「専門性」が大切であることから、小学校に「音楽専科」が必要であると捉えていることがわかる。

### 3-3 高校教師の考える「小学校に『音楽専科』が必要な理由」

最後に、高校教師の自由記述では、文の集計数が40文、抽出語の総数は202語となっている。そしてこの内、出現回数が2回以上の語は13語であった。

頻出語の内訳は、「必要」（出現回数：4）、「音楽・基礎」（同：3）、「学ぶ・教科・子ども・指導・小学校・専門・専門性・知識・表現」（同：2）となっている。

これらの共起関係を見ると、小学校では音楽の基礎、知識を指導するものの、教師には専門性が必要であると指摘していることがわかる。

## 4 大学で学ばせるべき知識や技術について

### 4-1 小学校教師の考える「大学で教えてほしいこと」

まず、小学校教師の自由記述を分析したところ、文の集計数は906文、抽出語の総数は1,792語となった。この内、出現回数が3回以上の語は82語であった。

頻出語の上位17位（出現回数：5回）が表7である。また、これら頻出語に対して行った共起分析の結果が図8である。分析に当たっては、最小出現数を3、描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定している。

小学校教師の自由記述の頻出語は、「楽器」や「音楽」、そして「指導法」が上位3位を占めていた。そして図8からは、楽器に対して、その扱い方の習得の必要性を感じていること、また、音楽に対しては、「技能」（頻出語順位8位）を身につけて欲しいと感じていることがわかる。「指導法」に関して言えば、音楽に対して苦手意識をもっている子どもや、器楽や歌唱の指導法が大切なことが見てとれる。

そのほか、合唱指導や鑑賞、発声法や音楽づくり、指揮法といった、音楽を教える技術の習得が重視されていることがわかる。

### 4-2 中学校教師の考える「大学で教えてほしいこと」

次に、中学校教師の自由記述を小学校教師と同様に処理したところ、文の集計数は227文、抽出語の総数は781語となった。この内、出現回数が2回以上の語

表7 小学校教師が大学で教えてほしいこと（上位17位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
楽器	38	楽しい	8
音楽	30	子	8
指導法	29	実践	8
歌唱指導	28	奏法	8
指揮法	22	経験	7
児童	18	子ども	7
合唱指導	16	指揮	7
技能	15	ピアノ伴奏	6
鑑賞	13	教材研究	6
技術	13	工夫	6
授業	13	合唱	6
知識	13	合奏指導	6
発声法	13	読む	6
指導	12	譜	6
扱い方	11	感性	5
音楽づくり	10	教科	5
仕方	10	見る	5
演奏	9	考える	5
学ぶ	9	持つ	5
伴奏	9	多く	5
ポイント	8	打楽器	5
歌唱	8		

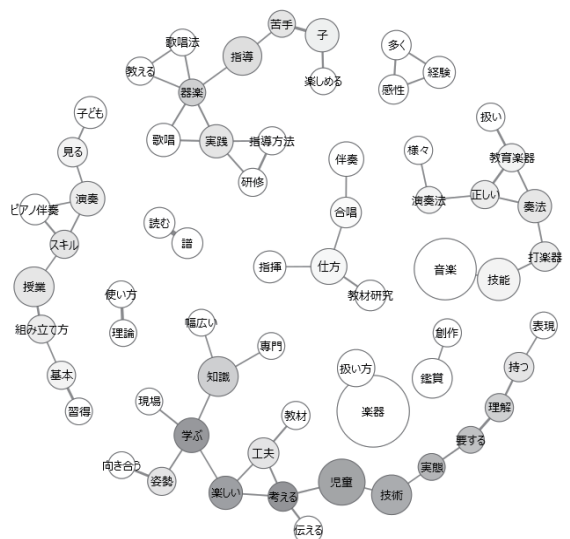


図8 小学校教師が「大学で教えてほしい」と考えていることの共起ネットワーク

は56語であった。頻出語の上位7位（出現回数：3回）が表8である。また、これら頻出語に対して行っ

た共起分析の結果が図9である。なお、分析に当たっては、最小出現数を2、描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定している。

表8 中学校教師が大学で教えてほしいこと

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
音楽	14	充実	4
生徒	8	人	4
知識	8	表現	4
技術	7	いろいろ	3
ピアノ伴奏	6	演奏	3
歌唱	6	歌う	3
指導	6	教材研究	3
力	6	経験	3
学ぶ	5	見る	3
技能	5	仕方	3
指導法	5	指導案	3
授業	5	創作	3
吹奏楽	5	伝統音楽	3
日本	5	評価	3
歌唱指導	4	和楽器	3
指導方法	4		

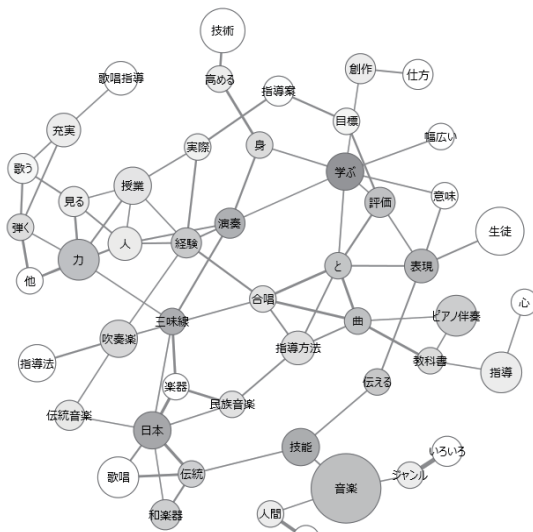


図9 中学校教師が「大学で教えてほしい」と考えていることの共起ネットワーク

中学校教師の自由記述の頻出語は、「音楽」、「生徒」、「知識」、「技術」が上位3位を占めており、その次に「ピアノ伴奏」、「歌唱」、「指導」などが続く。音楽については、音楽の技能、そして様々なジャンルを学ばせることの必要性が挙げられ、また、教科書に

掲載されている楽曲などのピアノ伴奏の技能の習得に併せて、日本の伝統音楽や、部活動に関連した指導技術の習得についての意見が多いことがわかる。

#### 4-3 高校教師の考える「大学で教えてほしいこと」

最後に、高校教師の自由記述を小学校教師と同様に処理したところ、文の集計数は59文、抽出語の総数は191語であった。そしてこれらの抽出語の出現回数をまとめると67語となった。その内、上位4位（出現回数：2回）が表9である。また、頻出語に対して行った共起分析の結果を図10に示した。なお、分析に当たっては、最小出現数を1、描写する共起関係の絞り込みは、描画数を60に設定した。

表9 高校教師が大学で教えてほしいこと

抽出語	出現回数
指導法	5
音楽	4
歌唱	3
技術	3
知識	3
ピアノ	2
ピアノ伴奏	2
意義	2
歌	2
楽器	2
向上	2
考える	2
吹奏楽	2

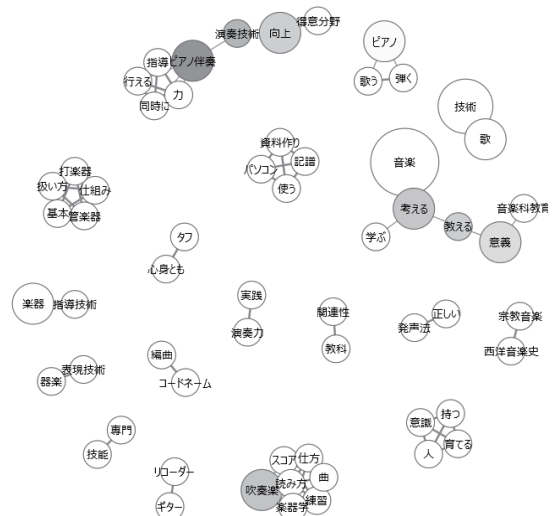


図10 高校教師が「大学で教えてほしい」と考えていることの共起ネットワーク



高校教師の自由記述は、サンプル数こそ少ないものの内容は多岐にわたり、より専門的な記述が見られることが特徴であろう。例えば、器楽や楽譜の指導技術や表現技術、また、得意分野の演奏技術向上なども意見に含まれており、さらに吹奏楽についてはかなり包括的な知識や技術が求められることがわかる。音楽や音楽科教育については、そのもつ意義を考えるとや学ぶことが望まれている。

## IV 総括

### 1 音楽科教育の必要性について

小学校に音楽科が必要な理由について、小・中学校の教師の共起ネットワークから、小・中の教師共に音楽科が「感性」や「心」を育むことを理由として挙げていることが明らかになった。また、小学校における音楽科は、専門性よりも音楽活動を通した心の育成にその意義が認識されており、中学校音楽科はより専門的な音楽活動を行ったり、仲間と表現を高度に作り上げていく過程で達成感や充実感を味わったりすることを通して、人間として成長することが期待されていることがうかがえた。また、思春期の過程で自己を理解したり、自分を磨いたりすることに対して、中学校教師が音楽科の必要性を述べている点は注目に値する。

### 2 小学校に音楽専科を必要とする理由

小・中・高の各校種の教師が、なぜ小学校に「音楽専科」が必要と考えているのかを分析した結果、全体の傾向として、小学校で音楽を教える上で、「技術」や「知識」を含めて高い専門性が必要であると感じていることが明らかとなった。

### 3 教師が考える「大学で学ばせて欲しいこと」

小・中・高の教師の考える「大学で教えて欲しいこと」で共通していることは、音楽の指導技術の習得である。ただし小学校では、主に授業に必要な歌唱・合唱や器楽の指導技術への言及が多いのに対し、中・高は、部活動（吹奏楽等）に関わる知識や技能の習得が求められていた。また、小学校では、児童への対応の仕方や、授業の組み立て方、進め方についての言及があるが、中・高ではそれほど見られない。これらの自由記述の分析を通して、大学の教員養成課程において「学生に学んでほしい」と教師が求めている内容や力

量は、教師の校種によって異なることが導き出された。

## 4 本研究における課題

本稿では、主に「音楽科の必要性について」、「小学校での音楽専科教師の必要性について」、「大学で学ばせるべき知識・技能について」の3項目を対象に、自由記述の分析を行った。この中で、「音楽科の必要性について」及び「小学校での音楽専科教師の必要性について」の項目については、選択肢で「必要」もしくは「どちらかという必要」と回答した者の自由記述回答を抽出して分析を行った。これは、いずれも「必要」と考える教師が多数を占めていたためである。しかし、「必要ない」と考える教師の意見についても検討が必要である。

また、校種別の回答者数に大きな偏りがあった点が課題として挙げられよう。小・中・高ではそもそも学校数に隔たりがあるが、とくに高校教師について回答数が少なかった。したがって、本稿での分析結果を「高校教師の音楽指導観」と捉えることは困難である。

しかし、本稿で用いた分析方法は、従来は拾い上げることのできなかつた語とそれがもつ意味について着目することが可能であった。これは特筆すべき利点である。その一方で、紙幅の関係上、興味深いデータについては取り上げることとしたが、この点についての恣意性は否定できない。

最後に、本来テキスト分析において、コーディングルールの作成は結果に直接影響する重要な作業である。本研究でのコーディングルールの精査については、引き続き検討していく必要がある。

## 付 記

本研究は、JSPS科研費 26381240の助成を受けて行っている。

本稿の執筆にあたっては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 1、2、Ⅳを古山が、Ⅲ 3、4、及びⅣのⅢ 3、4に該当する部分を瀧川が担当した。

## 注

- 1 本研究で用いた質問紙調査は、古山と瀧川が広島県の全公立小学校・中学校・高等学校で音楽指導を行っている教師、及び熊本県の公立小学校教師で音楽研修会に参加していた教師を対象に実施したものである。回答数は、小学校

教師280, 中学校教師63, 高校教師19, 小・中一貫校教師6であった。

なお, 本研究で用いている「音楽指導観」とは, 「音楽を指導すること」についての教師の認識や考え方を指す。

2 古山典子／瀧川淳 (2017) 「アンケート調査から見る音楽教師の音楽指導観」『福山市立大学教育学部研究紀要』5, pp.25-33。

3 KH Coderは, 2001年に樋口耕一によって開発された分析ソフトウェアで, インターネット上に公開されている。  
<http://khc.sourceforge.net> (2017年9月5日ダウンロード, Version 2.00f)

なお, 2017年10月23日現在, 上記サイトにはKH Coderを用いた研究事例が, 1,693件挙げられている。

4 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版, p.19。

5 「共起ネットワーク」とは, 出現パターンが似通った語を線で結んで図式化したものである。(同書, p.157。)

6 同書, pp.157-158。

7 小学校に音楽科が必要だと考える教師は, (「とても思う」と「まあ思う」を合わせて) 小学校教師が99%, 中学校教師は85%, 高校教師は94%であった。(古山／瀧川, 前掲書, p.27を参照。)

(2017年10月23日受稿, 2017年11月24日受理)

## The Teacher's Views of Music Teaching: Through the Quantitative Content Analysis of Free Descriptive Answers

KOYAMA Noriko <sup>(1)</sup> and TAKIKAWA Jun <sup>(2)</sup>

In this paper, we will clarify the teachers' views of music teaching from the free descriptive answers that we conducted the questionnaire survey to the elementary, junior high, and secondary school teachers in 2016. The method of quantitative content analysis was used to analyze the data for this research.

We use the KH Coder software to analyze the frequently appeared words and co-occurrence networks of these words. We analyze the answers of (1) needs of music class and (2) of music teachers in elementary schools. (3) the knowledge and technics that we should learn in the university. The results as follows; (1) because of building sensitivities and souls. And there are also some answers considering the developmental stage of children. (2) was that music teachers needs to possess highly professionalism including "technic" and "knowledge" of teaching music. And lastly, (3) were vary between elementary, junior high, and secondary school teachers.

Keywords : questionnaire survey, music, views of teaching, quantitative text analysis, text mining

---

<sup>(1)</sup>Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University

<sup>(2)</sup>Department of Music, Faculty of Education, Kumamoto University